

令和4年度第1回練馬区幼保小連携推進協議会

開催日時	令和4年8月25日(木) 午前10時～午前11時30分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	会長	教育振興部長
	委員	田中泰行、桑田則行、鈴木裕美、鈴木康予、上野美和子、佐々木秀之、小高敏男、小暮文夫、山本浩司(敬称略)
	事務局	教育施策課長、学務課長、こども施策企画課長、保育課長
アドバイザー	桶田ゆかり(敬称略)	
傍聴者	なし	
案件	(1) 令和4年度練馬区幼保小連携研修会の実施報告について (2) 「練馬区における幼保小連携の推進について」の改定について (3) 「ねりま接続期プログラム～子どもの育ちと学びをつなぐ～」の改定について (4) 令和4年度練馬区幼保小連携に関する実態調査について (5) その他	

会長

これより令和4年度第1回練馬区幼保小連携推進協議会を開催します。
今年度初めての協議会ですので、委員の自己紹介をお願いします。

<各委員自己紹介>

会長

今年度は、「練馬区における幼保小連携の推進について」の改定があります。また、国においては、昨年度から幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会で検討が進められているなど、この時期の子どもたちの育ちと学びの重要性がさらに高まっています。

このような状況を踏まえ、十文字学園女子大学教授の桶田ゆかり先生をアドバイザーとしてご参加いただきました。桶田先生は、中央教育審議会幼児教育部会委員や東京都の子ども・子育て会議委員をお務めになったご経験があり、幼保小連携について深い見識をお持ちです。案件に入る前に、桶田先生から幼保小連携の推進のポイントなどについてお話を頂きます。

アドバイザー

現在、大事だと思っていることについて、3点ほどお話しします。

まず、『資質・能力』の話です。中央教育審議会に出席させていただいたときに、特に資質・能力の3つの柱のことが話題になりました。幼児教育も3つの柱でいきたいという文部科学省の提案があり、保育現場の者として出席していた私たち園長は反対しました。

なぜなら、知識・技能が変に取られてしまうと、小学校の前倒し教育を推進するような印象

になるからです。そのときに、文部科学省からは、小学校以降と同じ言葉を使わないと幼児教育が小学校教育につながっていることが分かってもらえないという説明がありました。そこで私たちは、幼児教育は「生きる力の基礎を培う」という理解のもと「基礎」を付けてくださいとお願いしました。そのような経緯でできた言葉ですので、幼児教育側は、その意図を分かっ
てつなげなくてはいけないし、逆に、小学校以降の先生方も幼児教育、もっと前の家庭教育からつながっているという意識をもっていただきたいと思います。

2点目は、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』に関することです。文京区に長くいましたので、現職では文京区の新採研修を担当することが多くあります。幼小中の新採が集まって、それぞれの校種で研究保育・授業を行い、お互いの教育について知る研修で、半年ほど前は幼稚園の3歳児の保育を公開しました。私は1学期の姿を見ていたので、随分伸びやかにまとまってきたなと思ったのですが、小・中の先生方からは、子どもたちそれぞれが勝手に発言をしている、もっと順番に言わせたほうがいいのか、人の話を聞くように指導する必要があるのではないかという意見をいただきまして、予想通りだと思いました。

3歳は担任との安心感・信頼感の中で伸びやかに自分を出せるようにすることが大切です。周りから見るとめっちゃめっちゃかもしれないけれど、みんなが先生の方に向かって、まとまっている今の姿が大切という見方をしていることを伝えないと、3歳でも2歳でも小学校のためにきちんとしなければいけないというように取られてしまうと思いました。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中の例えば自立心のところでは、1行目に「しなければならないことを自覚し」と書かれています。これは保育者が自覚させるのではなくて、子どもが自分で思えるように育てていると伝えていかなくてはならない。幼児教育で大切にしていることを伝え、それを見ていただくために10の姿があるということで、幼児教育の充実がないと小学校にはつながっていけないのだなということも自覚したいということです。

3点目です。『スタートカリキュラム』の冊子作成のお手伝いをさせていただいたとき、幼児教育の自分は何をすればいいのだろうと思いました。そのときに、編集に関わっていた生活科のエキスパートの先生の方に、幼児期の育ちからつながった内容になっているか、生活科というだけではなくて、幼児教育を踏まえたスタートカリキュラムになっているかの確認をしてほしいと言われました。それを聞いたときに、お互いに分からないところは任せますではなく、分からないから知ろうとしたり聞こうとしたりしないと、いつまでも平行線になってしまうと学びました。ぜひこの会でも、分からないことをお互いに知り学び合うような機会になるといいと思います。

会長

ありがとうございました。それでは、次第に沿って進めます。

「案件」の（1）令和4年度練馬区幼保小連携研修会の実施報告について、事務局から説明をお願いします。

<事務局 案件（1）について説明>

会長

研修会の報告について説明がありました。委員の皆様から何かご意見等あればお願いします

す。

(特になし)

後ほどお気づきの点がありましたら、ご質問頂いても結構ですので、先へ進めます。「案件」(2)「練馬区における幼保小連携の推進について」の改定についてですが、「案件」(3)「ねりま接続期プログラム～子どもの育ちと学びをつなぐ～」の改定が関連する案件のため、事務局からまとめて説明をお願いします。

<事務局 案件(2)、案件(3)について説明>

会長

「練馬区における幼保小連携の推進について」は幼保小連携の基本方針となる位置づけです。これを今年度改定するにあたり、実態調査をして、内容を踏まえて来年の1月20日に改定案を示して進めるものです。

それと並行して、「接続期プログラム」の令和5年度の改定に向けて着手するという一方で、具体的な内容はまだ示されておらず、意見を出すのは難しいと思いますが、現時点で何かお気づきの点やご質問はありますか。

委員

幼保小の接続が大事だと言われたのは、平成の初め頃だと思います。そこから小学校の見学に行くとか、研修会を行っていますがなかなか進まない。でも、非常に大事だということで、「架け橋プログラム」というものが、本当に今やらなければならないということで表されたと思います。保育所と幼稚園と小学校の先生方が集まって、しっかり共有して推進していく必要性を感じます。

委員

「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」では、3年という期限で、5歳児、6歳児の共通した幼稚園、保育所の年長児と小学校1年生の共通のカリキュラムを作ってほしいと言われていますが、私は義務教育開始を5歳にするところにつながるのではないかという恐れを持っています。

それは我々にとっても大変な問題ですし、スムーズな連携は大事ですが、幼保と小は概念などが全く違い、そこがとてもいいところなのです。これが5歳児就学につながるということに対しては、大変危機感を持っています。ですから、対応の仕方は、本当に幼保として考慮しなければいけないと感じています。

委員

確認ですが、「練馬区における幼保小連携の推進について」と「ねりま接続プログラム」は、既に作られているものを改定するのでしょうか。

事務局

既に作成されているものを改定するという事です。改定でどこまで手が入るのかというのはこれからの話になりますが、国が示している幼児教育や架け橋の重要なところは、従来、練馬区で考えてきたものと土台の部分はそれほど変わっていないと思っています。この内容をゼロベースで見直すとはならないというのが現在の認識です。

あと、お話がありましたが、幼児教育スタートプランが報道されて以降、幼児教育という言葉が、小学校の学びの前倒しと混在して世の中に伝わってしまっていると報道やニュース等を見ても思います。皆様のお考えと共通かと思いますが、単に学習の部分の前倒しということでは決してないと理解していますし、国の資料にもそのようなことがはっきりとうたわれています。そこは幼稚園・保育園・小学校の関係者の皆様や保護者の皆様など、広く多くの区民の皆様に、正しく伝わるように発信しなければならないと考えています。

委員

次の接続期プログラムから、架け橋期の5歳から1年生の2年間について掘り下げて特化した第2巻として作成できたらよいと思います。それがあつて5歳時のことから、小学校に行ったらどうなるのかなどが分かるかと思つきます。

例えば、幼稚園や保育所の子どもたちは、朝顔を植えると、自然の命について考えたり、花が咲いて美しいという感性を養つたり、枯れた花を摘んで、赤い花と青い花を混ぜると色が変わつたりする経験をしています。その経験を小学校の生活科の中で引き出す実践をしていると研修会で聞いたことがあります。そういうつながりが子どもたちの中にあることで、もっと知りたいとか、こんなことをやったら楽しいとか、学習への意欲などいろいろなことにつながると思うので、幼児期、小学校の教育の中で共通理解ができる内容になるとよいと思います。

事務局

改定のやり方はいろいろな方法があると思つますので、今後もご意見を頂ければと思つます。

アドバイザー

委員の方がおっしゃつたことで気になつたところがあります。今回、このプログラムを改定するのであれば、接続期のことを考えるのか、架け橋期も目指す会なのかを確認したいと思つました。

それから、もし接続期ということで、より充実したプログラムを作成するなら、見直しの観点はコロナの関係で子どもたちの育ちがどう変わつて、何が必要なのかという視点であると思つます。また、具体的な実践については、小学校以降の先生方が見て、幼児はこういうことを学んでいるのだと幼児期の資質・能力や幼児期の終わりまでに育つてほしい姿の考えを伝えられる実践になっているかという確認は必要になると思つます。

また、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」は、架け橋期のプログラムを作成するに当たつての説明であり、接続期のことではないので、先ほどの説明順には行かないと思つています。もしこれを参考にすると、あるところはフェーズ1の基礎づくりのところ、接続期としてはまだですとか、これはフェーズ2に行つているというような見方をしない

と、いつまでも接続期で終わってしまうと危惧しています。

接続期という言葉が架け橋に変えたときに、接続のイメージだと幼児期のアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムが、両方並んでくっつけられればいい、お互いが関わっていても接続している、というイメージになってしまいます。それを払しょくするために、スパンを長くして、お互いにもう少し重なるところを作ろうという意味で架け橋期ができたと思っています。今後、そちらにもっていくための今の接続期の充実なのか、今までやってきたものを見直すのか、その方向がもう少し分かるといいと思います。

事務局

架け橋のためのプログラム、架け橋のための取組を中心にしたと思っています。現在「接続期プログラム」という言葉を使っていますが、先生や委員の皆様のお話を聞いて、接続期プログラムと架け橋プログラムの立ち位置に関して整理する必要があると思いました。

具体的なイメージとしては、先般の調査員連絡会で話したところでは、従前の接続期プログラムは、小学校の部会、幼稚園の部会、保育園の部会のように、それぞれ別々に内部検討を進めました。ただ、架け橋となる双方の立場の方が一緒に考えるというところから始めたいということで、調査員連絡会でも、そのやり方を基本としながら具体的な検討のスケジュールや体制を組みましようということをお話しています。分かりやすく正確に伝えるように、資料や言葉をこれから精査したいと思います。

委員

接続期と架け橋ではかなり意味合いが違ってくると思います。本当に架け橋を考えようと思うと、今までの小学校教育を大幅に変えないといけないので、それだけのことができるのかどうかと思います。

それから、今の幼児教育、特に年長組の1年間は大事な1年間なので、それが薄められてしまうのではないかとこの恐ろしさも感じています。ただはっきり言えることは、幼保小連携と言いますが、お互いに交流したり、訪問をし合ったり、先生たちで話し合ったりというのは本当の連携ではなく、架け橋のカリキュラムを作るということが本当の連携だと思うのですが、それには困難と危険性が伴うのではないかと強く思います。

事務局

簡単にはいかないと思いますが、先生方のご協力を頂きながら前に進めたいと思います。

会長

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。様々なご意見を頂いたものを踏まえて、またご相談をさせていただきながら進めたいと思います。

では、案件（4）になります。「令和4年度練馬区幼保小連携に関する実態調査について」、事務局から説明をお願いいたします。

<事務局 案件（4）について説明>

会長

実態調査についての説明について、ご質問があればお願いします。

委員

幼保対象の質問で、学芸会等の文化的行事見学、運動会の行事見学と書いていますが、これが交流ではなくて連携と書いてあるので、ただやったのではないということで、教員同士が見学について打合わせや相談をしたといった、踏み込んだ文言を入れたほうがよいと思いました。

そうすると、小学校対象の質問の学芸会等の文化的行事見学の受け入れの記述も、ただやっただけではなくて、打合わせなど両者で相談してやって、評価・反省をしたという気持ちも持ってほしいので、同様にに入れていただけたらと思います。

会長

ありがとうございます。もし今後何かお気づきの点があれば、いつまでに事務局に言っていただければよいですか。

事務局

委員の方からお示しいただいた点については、修正を加えたいと思います。また、それ以外のご指摘についても9月2日までに事務局に教えていただければと思います。

委員

今お話のあった学芸会とか運動会、特に学芸会についてですが、幼稚園と小学校のやり方は、感覚が違うなというところがあるので、幼稚園における、例えば発表会の表現活動の狙いと、小学校におけるねらいの違いにも踏み込んだほうがよいと思いました。

事務局

今のお話はもう少しやり取りをしたいと思いますので、個別にお話しをしたいと思います。

アドバイザー

気になっている箇所は、5歳児の指導計画がつながるように工夫していますかという問いです。つながるような工夫は、回答者の解釈・取り方が違うと思ったときに、どのような内容でもつなげていますと言ったら丸になってしまうと思いました。ただ、詳しく聞いて違うものが出てきても困ると思ったので、聞き方が難しいと思いました。

事務局

まずは基本的なところをしっかりと取り組んでいる、その重要さを認識している、そういう意識が根底にあるかを把握したいと思います。掘り下げる質問に関しては、ヒアリングや個別のアンケートにご協力頂くといった形を考えたいと思います。

アドバイザー

交流も含めて連携をやっている成果をどう受け止めるのかは、最初にいただいたアンケートではやってみるといふ答えになりましたが、成果や課題がもう少し実態として聞こえないかと思いました。

委員

今、お話があったように、何年間も幼保小の連携というのをやってきたわけですから、その成果をどのくらい指導計画に入れているかという設問があってもいいかもしれません。ただ、あまり詳しく過ぎてしまうと、今度は答えるほうがめちゃくちゃになってしまうので、1つ、2つ追加するとか変更するくらいだったらいいと思います。

会長

ほかにはよろしいでしょうか。先ほど申し上げましたが、ご意見等あれば9月2日までにお願ひできればと思います。以上で本日の案件は終了となりますが、何かあればお伺ひします。

委員

幼児期の特に5歳児の姿は、保育を見ていただくことをご理解いただけると思ひます。5歳の育ちを見たいという申し出がありましたら、随時受け入れたいと思ひます。

委員

区立の保育園も去年から「いつでも、どこでも、どなたでも」というキャッチフレーズで、多くの方に保育園を知ってもらう機会や保育園同士がつながる取組を行っています。

コロナ禍でとてもハードルが高いのですが、紙面上の連携ではなく、具体的につながっていきたく思ひます。プログラムも実際の子どもたちの姿や、研究発表のような取り組みを踏まえたものにしていけたらと思ひます。

保育園でも運動会は既に始まっていて、どういふことをやりたいか子どもたちと考えながら運動会をつくり上げています。子どもたちがどう過ごしているか知りたいといった申し出があれば、急でも受け入れしています。そのような理解が深まると、会議もより濃いものになると思ひます。

会長

ありがとうございます。今回いろいろご意見を頂きました。この後、実施する実態調査、それから素案をご検討いただきますが、「幼保小連携の推進について」の検討素案を作る際も参考にしたいと思ひます。

それでは、第1回幼保小連携推進協議会を終了いたします。